

### 主において常によろこびなさい

会衆参加の礼拝が再開され、今日ご出席なされた皆さんを心より歓迎いたします。依然としてコロナが終息していないので、慎重な気分でもありますが、皆さんがこの場にご出席されたことは勇気であり決断であると思います。神様は皆さんの心を覚え、喜び、祝福として報いてくださるでしょう。

ほとんどの信徒たちは、自分にとって恵みとなり、力となり、喜びになるみ言葉を期待しながら主日の礼拝に出席します。けれども時折そのような期待とは異なり、理解難い、負担になる聖書のみ言葉に触れ、戸惑ったり、がっかりしたりします。けれども、がっかりしないでください。「良薬は口に苦し」という諺があるでしょう。たとえ理解難い、負担になるみ言葉も、皆さんの魂を元気にする良い薬になるかもしれません。

今日ご一緒に読んだ福音書も去る3週間と同じく、律法学者とファリサイ派の人々を諷刺するための内容です。ですから、私たちは第三者の立場から少し気楽に読んで良いのです。けれども、「他山の石」として自分のためのみ言葉と受け入れれば、より大きな恵みになるでしょう。

イエス様はこの世の中に新しい世界、天の国が成し遂げられるのを望まれました。それは正義で、恵みがあふれる世界です。誰も抑圧されず、お互いを尊重し合い、共に嬉しく生きていく世界です。そのような世界のためにイエス様はすべての人々を癒し、回復させてくださいました。これらの癒しの出来事は、「全ての人々が神様のうちに自分の価値ある人生を過ごすことができる」ということを知らせる象徴的な出来事です。ところでこの天の国は、私たちが成熟した姿で神様のみ言葉を受け入れなければ、成し遂げられません。天の国は、私たちの成熟した人生の中でこそ成し遂げられるものであるからです。ですからイエス様がまずお望みになったのは、私たちの信仰的な成熟なのかもしれません。その成熟は、変化が必要な時、その変化を受け入れることです。

今日ご一緒に読んだ福音書の「婚宴の喩え」は、天の国が成し遂げられる時にどんなことが起こるのかを示しています。イエス様がこの世にいらっしゃってから、人々は婚宴に招かれたのと同じ状況でした。招かれたということは天の国に入ることであり、天の国に入ることは神様のみ言葉に従うことであるからです。けれども、イスラエルの指導者たちはこの招きを断りました。いや、断るにとどまりませんでした。招きを知らせるために来た僕たちを侮辱し、さらには殺してしまいました。それは、イスラエルの指導者たちが自分たちの既得権、そして既存の人生を守るために何でもやってきたことを意味します。その結果どうなるのでしょうか？ 聖書には、「王が… 人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った」と記されています。厳しい代価を払うことになるということです。

ところで婚宴はこのようにむなしく終わってしまうのでしょうか。そうではありません。天の国の宴は続かなければなりません。これからこの宴には他の人々が招かれます。私たちは、彼らが徴税人、娼婦、そして社会的に疎外されていた人々であることをイエス様の活動を通して推測することができます。イスラエルの宗教指導者たちには、このような人々が天の国の宴に招かれるとは想像もできなかったでしょう。けれども神様はご自分を信じて従う民らのために宴を開こうとされます。今日ご

一緒に読んだイザヤ書にもこのように記されています。

「万軍の主はこの山で祝宴を開き／すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。」(イザヤ 25:6)

しかし、この宴への招きのメッセージは、人々が聞きたいと思っていたこととは異なります。その違いはどのようなものでしょうか。

多くの人々は福音書に登場する人々が皆自分勝手に行動する姿に驚きます。普通、王に招かれれば応じるのが当たり前のことですが、人々は王の招きを無視します。彼らは、王が送った家来たちを乱暴に扱います。また、王の乱暴な行動も理解できません。そして、さらに理解できないのは、王が婚宴に招いた人を、礼服を着ていないという理由で追い出すのです。それもただ追い出すのではなく、彼の手足を縛って、外の暗闇に放り出します。本当にひどいです。この人が貧しい人、疎外された人なら、社会的な排除や差別ではないのでしょうか？ もちろん、そのようにも解釈することができます。けれども、ここで注目すべきなのは、礼服を着ていない者の態度です。彼は王の質問に何も答えませんでした。何故彼は答えられなかったのでしょうか。もしかしたら彼の沈黙が、彼の何か大きな間違いを意味しているのではないのでしょうか？ それでは彼はどんな間違いをしたのでしょうか。

多くの人々が神様から「今の姿そのままを愛して、変わる必要はない」という言葉を聞いたがっています。「今の姿のままで何の問題もない」と言われたがっているということです。それこそ安心できるからです。礼服なしに婚宴に参加した人もそうだったようです。もちろん、神様はすべての人をありのままの姿で受け入れてくださいます。イエス様が、病気の人々が尋ねて来た時、彼らを断らずに皆を癒してくださった姿からも分かります。けれども注目すべきことは、「イエス様が彼らに、『今の姿で何の問題もない』とはおっしゃらなかった」ということです。娼婦たちと徴税人がイエス様のところに訪ねてきた時も彼らを受け入れられました。「今の姿そのままでも何の問題もない」とはおっしゃいませんでした。これは何を意味するのでしょうか？ それは変化です。イエス様は、彼らの姿そのままを愛しておられましたが、彼らが過去の姿に留まっていることはお望みになりませんでした。イエス様の愛は、人々の変化、成長、成熟を求めています。けれども、彼らが招きを断った理由の一つは、自分たちの生き方から変わりたくなかったからです。彼らは自分が生きていた生き方通りに畑に出かけ、商売に出かけたがっていました。

礼服を着ないで婚宴に参加した人の過ちも同じです。彼は招かれても来なかった人と同じように変化を望まなかったのです。新たに招かれた人々は皆礼服を着て、変りましたが、彼は変化を望みませんでした。それゆえ、王の問いに沈黙するしかなかったのです。

『星の王子様』という本を読んだ方は、星の王子がキツネにこのように話している場面を覚えていらっしゃると思います。

「愛するということは、手なずけられることである。」

手なずけられること、それは愛であり、変ることでもあります。神様の愛は私たちの変化のためのものです。私たちが神様を愛すれば、その愛は神様のみ旨に従って変わっていくのです。愛して愛されるこの過程を通して人々は癒され、回復され、救いの道を進んでいきます。天の国もそのような変化の中で成し遂げられるのです。もしかしたら、私たちが迎えたコロナ・パンデミックも、私たちの生活の根本的な変化を求めるメッセージなのかもしれません。

説教を終りに、福音書に出てくる婚宴の礼服についてもう一つのことをお話したいと思います。皆さんも見当がお付きになったように、この礼服を着るといことは、神様のみ言葉に従いながら生きて行くことでしょう。すなわち、今日の福音のメッセージは、婚宴に招かれた人は神様のみ言葉に従う人生を通して招きに応えなければならないということです。今日ご一緒に読んだフィリピ書には、この招きに答える具体的な方法がこのように記されています。

「終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。」(フィリピ 4:8)

ここで挙げられた、すべて真実なことなどがどういうことなのかは、あえて説明する必要はないでしょう。皆さんが信仰生活を通して既に胸の中におさめていることであるからです。ただ、私はこれに加えて、「神様の招きを喜んで受け入れ、感謝の気持ちを持って生きていくことは何より大事なことであり」ということを加えたいと思います。喜びながら、感謝の気持ちを持って生きて行けば、神様の特別な祝福があるからです。それを示すみ言葉が、今日ご一緒に読んだフィリピ書にこのように記されています。

「どんなことでも、何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」(フィリピ 4:7)

この一週、いつも神様の招きに喜んで応え、感謝の気持ちを持って生きながら、神様が与えてくださる平和の恵みを豊かに受けられますように心からお祈りいたします。